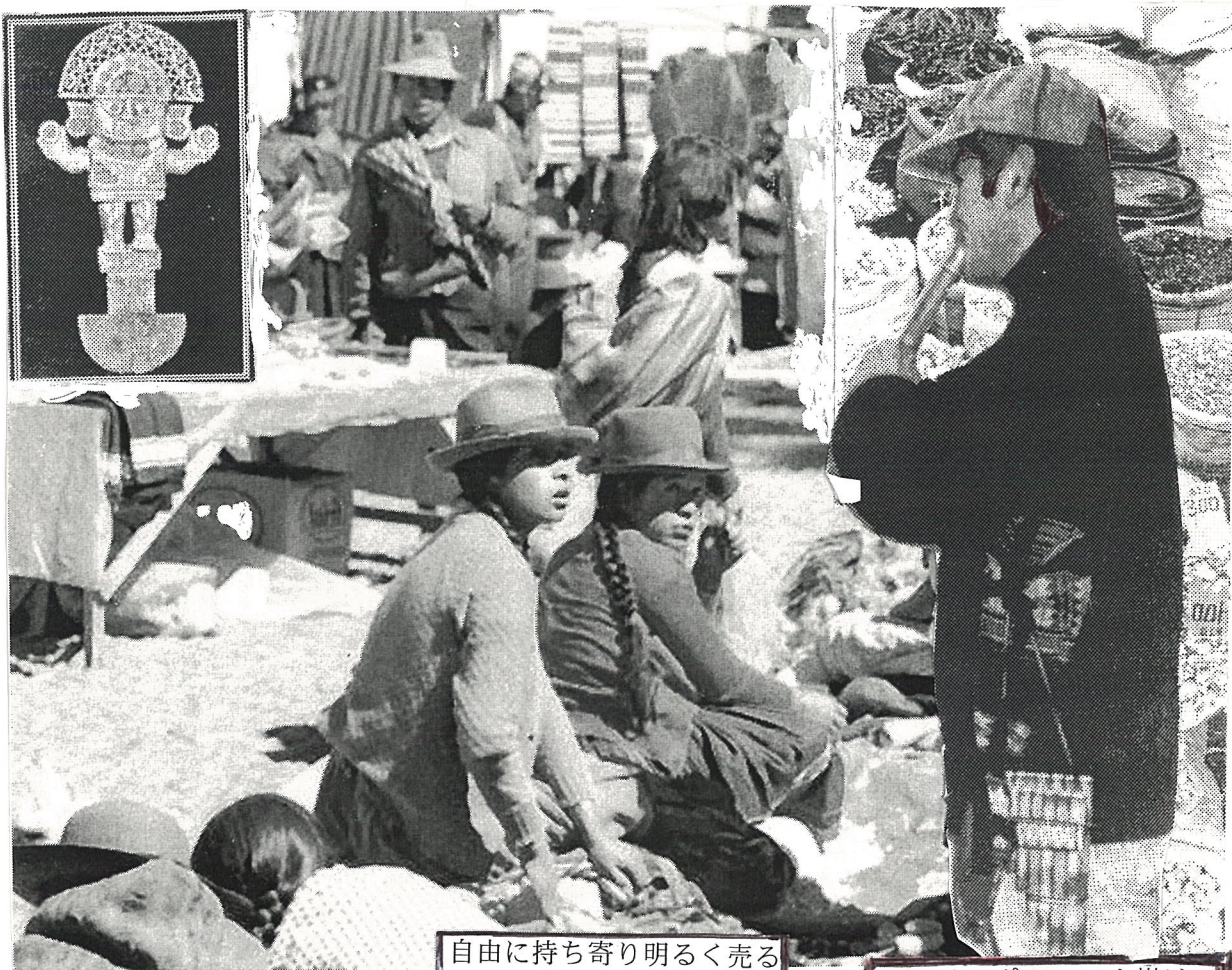
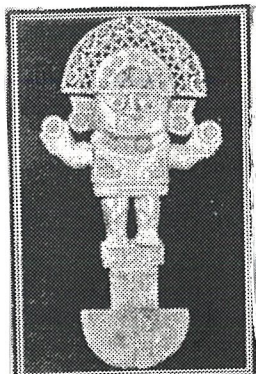


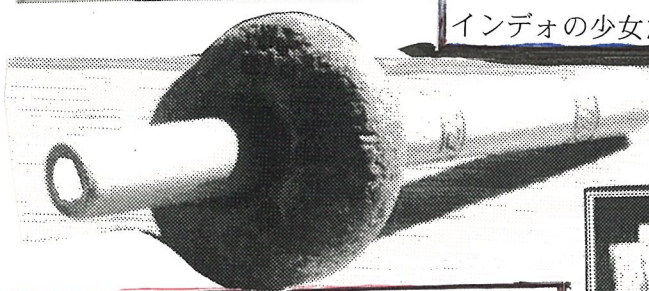
Peru

アンデスの風に吹かれて

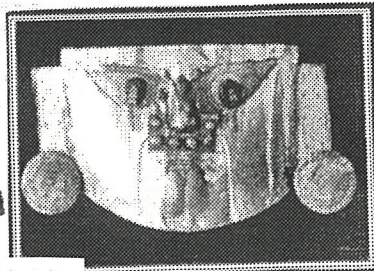


自由に持ち寄り明るく売る
インディオの少女たち

肩にサンポーニアを掛け
市場でケーナを吹く旅人



ウルバンパ川溪谷にひっそりと並ぶ露店で
買った棍棒頭（インカの石の武器）



黄金の仮面



魔除けのお面

アンデス生物文化研究所(主宰)木村優仁

「アンデスの風に吹かれて」

— 見はるかす夢を求めて、人生の道草4万キロ —

地球上には不思議とくつろぎ、気が満ち、力がみなぎるように感じられ、パワーがもらえる場所が何ヶ所もある。宇宙と自然（じねん）と自分との一体感の中で自分の魂が洗われてゆくことに気づくスポット（空間）。古代より聖地や寺院や教会はそんな所に建っていることでもわかる。ペルーにもいくつかの場所を感じてきた。それはマチュピチュの遺跡を吹き抜ける風に魅せられ吹かれていると、耳を通して頭を駆けめぐる雨音と肌をさす風、そしてインカのおいが漂う中で、朦朧とする意識は、いつしか時を超え、自らの詩（うた）を口ずさんでいた。

風は心の便りびと

ささやけば、踊り廻り音となる

寄り添い逢うなら音は楽しくなるものだ。

そう、詩（うた）は風と自然（じねん）のハアモニイ

大いなるものに包まれた自分の存在を確認し

見つめ直すひとときを求め。

雨合羽にやたら強い雨音だけが響き、足元だけを見つめ歩いていたらインカの3つの掟である「うそつかない、なまけない、ぬすまない。」が何故かふと思ひ出され、知らずにメロディを口ずさんでいた。福岡天神のフォーク喫茶「照和」に出ていたチューリップの前座で演奏していたリグビーというバンドのリードギターの彼より習い始めてギターをたたくようになった。18歳頃より始めたメロディ詩作とは、詩に瞬時に曲をつける方法です。作るのにむずかしい理論は必要なく、うまいへたはありますが誰でも作れるんです。車運転中やお風呂でなんとなく口ずさんでいるときがあると思います。それがメロディ詩作なんです。ヒット曲を立て続けにだす人でも、譜面を書けない人も多いし、クラシックなどの演奏されるプロでも曲を作ることが出来ない人が多いのです。心地よい曲を作る人は、良きアレンジャーに恵まれているからなんです。

さて、アンデスから目を移すと、長崎の雲仙岳のすそ野に広がる当地は、450の手延そうめん工場があり、世界最大の産地を形成しております。低迷する産地の振興と次代に伝えるため、お湯を注ぐだけで高齢者でも簡単に調理ができ、伝統の技が生きる手延そうめんを1年中味わえないだろうかと考え開発しました。手延素麺は、本来自然食品でもありカロリーも低くダイエットにも最適といえます。小麦粉をはじめ各種素材の良さを最大限に引き出し組み合わせしており、体と心にやさしく、病後の回復にもさらなる効果があるように食べる人を思い描き心を込め開発したものです。

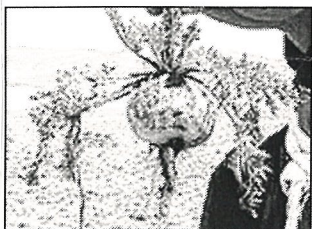
1999. 5. 18日に大統領であったフジモリ氏が来日した折り、貿易商社を廻わりペルーの食材を自ら売り込んでいた時、キヌアとマカを購入して有家そうめんに封じ込めた経緯があり、任期中にペルーを訪問する予定であったが時間が取れなかった。当初はブラジルからアルゼンチンにはいりチリからボリビアそしてペルーの行程で進めていたが何故かペルー向けの急遽の出発となりました。

ペルーは、世界の中でもっとも不思議で魅力的な国です。大部分の街が3～4kmの高地にあり独特の文明を受け継ぎ文化を創ってきました。国中を覆う赤茶色い日干し煉瓦の家、謎の中の謎を秘めたインカ帝国の遺跡、何の目的で描いたのかナスカ文明の地上絵、チチカカ湖の浮島で生活するインカの子孫、高地民族の心をあらわすアンデスの音楽と民族楽器、天にとどくような山並みが連なるアンデス山脈、砂漠とジャングルと高原と海を持ち世界の気候の全てがあるペルー。地球上の生きるものたちが、楽しく長く生きられる食材宝庫のペルー。一度お出かけされることをお勧め致します。いつの日か訪問される日の参考になればと願ってやみません。

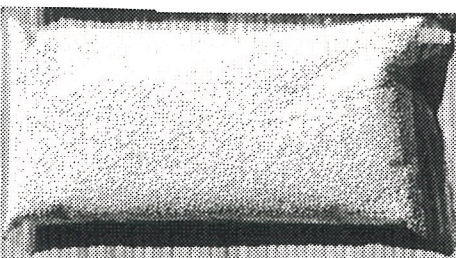
インカの首都クスコは、3300mでアンデスの中央に位置し高度も中くらいで、じゃがいもやトウモロコシが収穫でき、これより高度な4000mでは



空中都市マチュピチュ



インカのバイアグラ・マカ



母なる穀物「キヌア」



食材を売る少女



インカコーラ



アンデス山脈



パンアメリカンハイウェイ
(右は牛の歩道)

キヌアやマカの栽培やリャマやアルパカの放牧が行なわれ織物ができます。下山したアマゾンでは胡椒やコカを栽培でき木材も豊富です。西には豊かな海があります。このように登り下りしながら物々交換を行っており大帝国の礎と成っていました。このようにして高度差を活用した大帝国の形成をみたのです。一番の収入源であるアルパカやリャマは、4000m以上にしか育たない高原の草を好むので、アンデスの民は家畜にあわせて住居を構え暮らしています。だが、彼らの主食であるジャガイモは、高度3000mまでにしか育たないんです。自然や動物と共に生きなければならない高原の厳しい生活があります。

4年前より研究して着々と進めてきたものであるが、急遽と久しぶりの海外なので準備にてんてこ舞いであった。長崎空港より羽田に飛び京成で成田に向かうことにした。時計は取られていいような安い物を購入して行こうと考えていたので、空港内の店を廻ったが購入しなかったことがプーノでの小さなハプニングに出会うことになる。

出国の手続き検査でこの時計が引っかかり、何度もゲート往復させられた。(それは黄金の金時計のためで検査の度に音が出ること8度経験)、そして4店ある免税店をまわり何故か日本酒の紙バックを購入して17時発ロサンゼルス行 JAL066 に乗るためにB94ゲートに向かう。だが離陸は17時58分となった。主な観光以外はなるべく食材市場などを見て回り過ごしたいと考えている。1時間程して何故かやさしく感じられるスッチイーが食前酒を配ってきたのでビールを飲み、続いて夕食のビーフかチキンが配られてきたのでワインをもらいチキンを食べた。食事後は眠く成ったので空席が多く横になって行けそうで、4シートを占領して眠ることにした。ロス到着2時間前に食事が配られ、午後7時頃に寝て12時50分頃に起きる。外はマイナス88度で高度は12500メートル。LOS時刻午前09時45分に到着した。時差は17時間である。ロスで入国手続きを済ませて預けたスーツケースを取り仲間を待っていると静岡の姉ちゃんたちのスーツケースだけがないと添乗員が空港内を走りまわっている。さんざん捜したあと「自分の荷物を各自取って下さい」と言うので取ると、真ん中にその娘の荷物が残って大笑い。空港内を登ったり下ったりしてリマ行きに荷物を預けてLAN航空のカウンターで搭乗手続きを済ませた。スーツケースを一つひとつ開けて全体を拭き取り麻薬感知器で調べている。これは麻薬等を扱ったことがある手かどうかの検査であると聞いた。空港内を係員の指示で長時間歩かせてもらったが、乗る機体は日本から乗ってきた JAL 機の横に降りるときに目に入った所に鎮座しました。

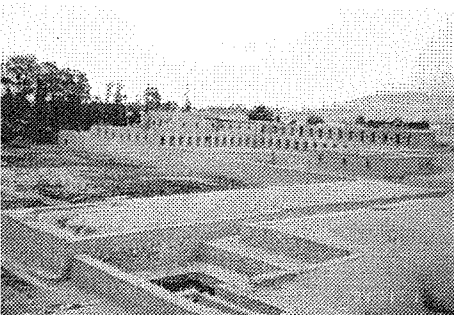
LAN航空601便A340は12時25分に離陸した。飛行機は新しいが座席が狭い。背もたれの枕の部分が自由に曲がり頭全体包むことができる。寝ているとスッチイーが起こすので、何かと思うと、イヤホンを配っており日本では考えられない。座ってばかりいるので、機内を歩いていると最後尾でスッチイーの面々が有意義に過ごしているの、逆に我々の方が気を使ってしまう。食事が配られ隣の横浜のお姉さんが「ワイン」と言ったら牛乳がきたので大笑い。その後夕食と夜食で今日は8食べたことになる。

ペルー首都リマの空港に午前0時に到着してタラップを降りると、左右に銃を持つ人に守られ到着ロビーまで歩く。入国手続きして荷物を受け取り検査を済ませて到着ロビーに行くと、現地のガイドの具志堅さんが待っていた。駐車場の方に行くと3台ほど駐車しており、いつもの感でサイドミラーにガムテープを貼っているバスと思ったら、ガイドはそこを通り抜けて真新しいバスの前に止まった。リマ市内は汚れており、夜景もぼんやりと見えるのは、雨が降らないので建物や道路もほこりまみれの上、排気ガスもひどく、さらにはフンボルト海流のお陰で1年中曇っていて晴れた日が少ないという。リマのホテルに午前1時30分に到着した。入口に2名の警備員と中に1名の警備員が待機してガードしてくれた。部屋に入り午前3時(日本午後5時)に家に電話すると誰もでない。今日はゆっくりのリマ市内観光である。

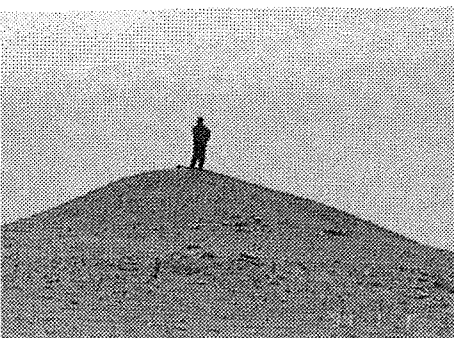
朝食をすませてホテルの売店でペンダントのオカリナとケーナを買った。昨日のベンツのバスが来たので乗り出発した。我々が初めて乗るらしく運転手もぎこちない運転である。パンアメリカンハイウェイに入ると、今日は日曜日なのでレジャーのために郊外向きに全車線一方通行らしい。ペルーでは夏休みが3ヶ月とのこと。道路の両側に小高い山がいくつもあり、山の斜面に沿って屋根のない不法住居が建っている。リマ市の人口は公式には800万人と言われ



毛が1本もなく
体温が43度ある犬



処女の館アマクーナ



丘の上で銃を持つ人



黄金博物館



薬草（ハーブ）の食材市場

ているが、不法住居者が200万人いるとのことでペルー人口の三分の一である。よく見ると電柱にたこ足配線みたいに電線がまとわりついているのは、勝手に引いているらしく撤去してもイタチごっこらしく電力会社は、電気料をアップしてそのつけは善良な市民にきているらしく電気料がすこぶる高いらしい。雨が降らないので屋根が必要なく、よしず張りの家が多い。フジモリ氏が特に承認してやったことで人気がでたが、国より認められたら屋根を付け親戚を呼んでお祝いする。

プレインカ時代のパチャカマ遺跡に着く。入口の事務所の前にはアルパカとインカ犬が寝そべっている。パチャカマとは、日本で言う「お伊勢参り」らしい。パチャは天地で、カマは創造者、つまり天地創造者と名付けられたプレインカ時代の遺跡である。砂漠地帯であるが水源地である謎の水道がある。太陽の神殿や月の神殿の儀式に使用する酒のチチャなどをつくるため集められた2000人が住んでいた太陽の処女の養成所であったアマクーナがある。それらを守るため丘の上には銃を持った兵士が24時間監視している。まず口笛を吹き、次に空に向けて銃を撃ち、その後は怖いことになる。階段を登る所の土壁が赤く染まっている。これはサボテンの葉に付く虫（表面は真っ白）をつぶすと真っ赤になり、それで染色したらしい。世界の至る所より石を持ってくる同行のおじさんが石を拾った時、口笛が聞こえてきた。現地のガイドは、ガイド免許を取り消される心配で真っ赤な顔で怒り遺跡を出るまでおじさんより離れなかった。出口の事務所でインカ犬は珍しいので降りて写真を撮った。体温が43度あって、体毛はないが頭はモヒカンである。寒いときには抱いて寝るらしく、日本では60万円程するらしい。遺跡を後にして地鶏専門店では昼食を取った。タンドリーチキンといって鶏の丸焼きを、からしとニンニクで食べるもので、すごく美味しくて追加注文する人が多かった。ペルーでは、飲む前に足元に流し大地に感謝してサル（乾杯）と高々とグラスをあげて飲み干すらしい。

最後にワナワナ入りのアイスクリームが出され、香りがよく美味しかった solah. narys を後にしてリマ市内を走ると電車が何台も止まっているのが見える。線路は4キロ程あり、フジモリ氏の前の大統領時代に建設されたものであるが、賄賂の横行で建設は中断され「走らない電車」と言われている。

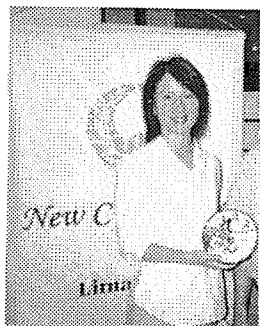
黄金博物館に着くと、入口でカメラやビデオの持ち込みが出来ないのでチェックされる。最初の部屋には銃や鎧が数多く展示されており、地下を降りて行くと黄金の扉があり部屋の中は黄金だらけである。大半はスペイン人が侵略したとき、略奪してしまっているが、貴人の墓を盗賊が掘り起こし財宝を横流ししないよう、持ってきたら買い上げると盗賊たちに告げミゲル・ムヒカ・カーヨ氏が集めたとのこと。又、近くには天野芳太郎氏が個人的に集めた有名な天野博物館もある。

インカは、文字や鉄や車輪がなく石の文明なので、石に棍棒を通した武器で戦っていたのでよく頭が陥没するため、1陥没した頭を手術しており何年かは生きていた。脳外科手術をした石のナイフ（押す時に切れるナイフ）やミイラや装飾品が展示されており、黄金の装飾品は軽くするために砂金を溶かして薄くのばし型抜きして中は空にしてある。額に穴があいているのは奴隷であり、サボテンの棘で口をふさぎ、唐辛子で目をつぶすなどの虐待を行っていた。インカ文明人は特に銀とスズが好きであったらしい。ペルートルコ石は、肌に付けても「ひやっと」としないのが特徴であり、銅（緑青）が化石化したものである。ブタピューマ（舌を出している）はオスのピューマで金玉がついている。インカの神様は白人なので、インカの皇帝は気を許し布教に來たと言うスペイン人のピサロと会っている。ジャガイモは5000種以上もあり、4000mの高原で作られている。夜間寒気にさらし凍らせ水分を抜き取って乾燥させて貯蔵可能にした保存食品（チューニョ）を作り都市や国家を作るだけのエネルギーを貯蔵することができるようになった。インカ帝国は、4000mを超えるインカ道を通して言葉を伝え、時には通信用の石カガミも使っていたらしい。その総延長は4万キロに及んだという。博物館の庭に10店ほど民芸品を売っている店があるのでインカコーラを片手に見て廻った。博物館を出て突き当たりのお店（絵葉書や本が中心）での若い男性がいる店。ここで「ペルーの全て」と「マチャピチュのすべて」の2冊を買っておくと帰国して資料になる。ここが一番安いのだが連れと共同にて値切ることもお忘れなく。

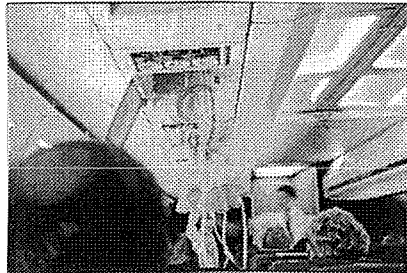
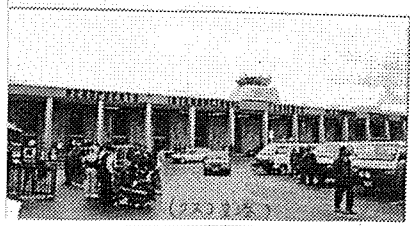
黄金博物館を後にして、リマの中心街のアルマス広場に向かう。ペルーにはインカコーラがあり、COLA（しっぽの意味）ではなくKOLA（高貴な意



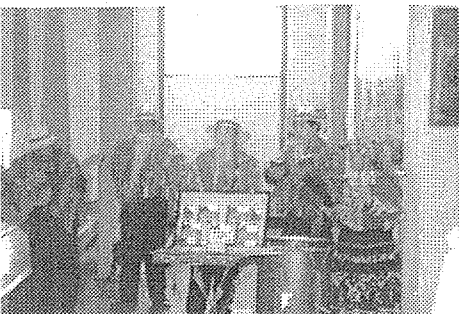
フジモリ氏が以前いた
大統領府



めぐみさんとカップメン



前に乗った人の機内写真



コンドルバスの音楽で

味)にしている。リマの銀座通りは、ひたたくりや売春で観光客が遠のいてしまい現在は人通りもない。広場に降りると大勢の人が寄ってきて取り囲まれてしまう。ギター弾きの女の子が、飴を3個1ソロで買ったら演奏して歌うとのことなので買うと歌ってくれたが、人だかりの輪がさらに広がってしまった。急いでバスに乗るよう3名のガイドは、両手を広げて大きな声で道を開けさせ通路を確保してくれた。乗り込んだ新型バスが民芸品売りのおばちゃんたちに取り囲まれてしまったので、バスは急発進した。行き交う路線バスは、日本製ばかりで〇〇商店とボディに書かれているのをそのままに使用しており、船便で来た日本の中古車を半日で改造して9名乗りのワゴン車を18席にして23名程乗せるらしく中腰の人も何人か見える。バスは、家具屋通りを走っている。この家具は虫食いの木で制作するので3年くらいしか持たないらしい。

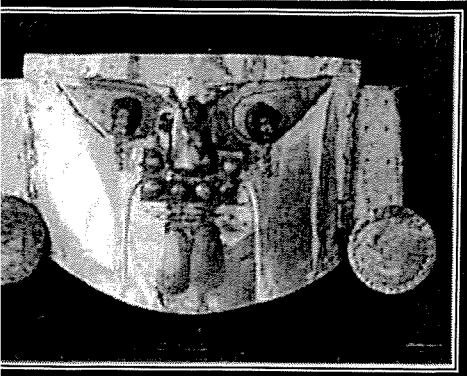
日系人夫婦が経営している店に着いた。看板もなく住宅街なので特に目立たなく、ガイドが来店を告げたら門が開き、入ると門が閉められ鍵が掛けられる。奥さんはアマゾンの奥深く入り草木染めの材料を取ってきて染めた小物が多く、それに部族ごとの面が数多く壁に飾られており素朴なものが多い。高地動物の織物は100パーセントのものはない。首に巻いてチカチカしなければいいと思って懐具合と相談して購入した方がいいのでは。ケーナとポーチとアルパカの織物やインカ塩(天日白塩)などを買ってホテルに帰った。

夕食には魚と野菜の酢のものであるセビーチェと葡萄の蒸留酒ピスコに卵白とレモンを加えてシェイクしたピスコサワーが出てきた。食事中にホテルのオーナーの魅力的な美人の娘さんよりマカとキャツクローの話やアドバイスが個人的に聞けた。めぐみさんが言うには「自然治癒力が向上し万能薬と言われるキャツクローは、薬効から見ると花が一番で葉が二番、樹皮は三番目である。花と葉は確保するのが難しいので見かけるのは樹皮ばかりである。最近ブーム成ってきたインカのバイアグラと呼ばれるマカは、素麺に入れるのではなくチップにして加薬に入れた方がよく。又、お茶漬の素に入れたら香ばしくて栄養価を高めるのではないかと」の貴重なご意見をいただいた。部屋に戻り日本に電話すると、母の家にかけた時、最後にでた母が「お腹の具合は悪くないか」と聞いたので「どうもない」と答えたが、クスコの夕方にはトイレが一番の友達と成っていた。帰って聞いたことであるが時差が14時間で丁度合うし、電話受けた時には母も急に具合が悪く成っていたらしく疑いのあった親子関係を確認したしだいである。

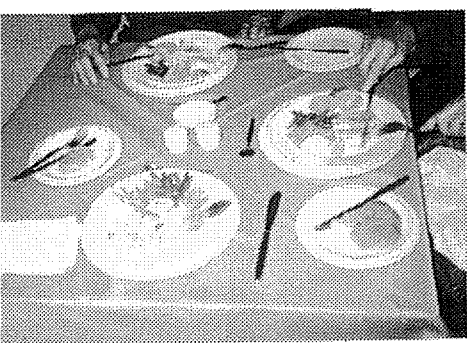
次の日は午前2時に起き4時にホテルを出発した。空港に向かうバスの中でクスコに着いた時の心構えが空港に着くまで繰り返された。「禁酒、禁煙、禁欲(入浴と性欲)、食事はゆっくり食べる、スープも囓んで食べる、昼は腹八分目にすること」などの注意を受けていると空港に4時45分頃に着き、時間が少しあるので朝食のおにぎりを一個食べた。中身はおにぎり、みかん、唐揚げ、チョコ3個の不思議な組み合わせである。高山病は、体の中に酸素が入っている間は何ともないが、なくなると成るらしい。クスコには朝早く着くので昼食後が問題で、夜はシャワーの圧力で汗を流しお湯には浸からない、枕は高くしないで足を高くして聖人のごとく右下で寝るのがいいらしい。

いつもの通り各自で搭乗手続きを済ませチェックインすると大きい荷物は係員が取って提げてみる。機体と写真に写り、着席して離陸時間を待っていると6時30分なのに空席はかなりあったが6時10分には空港を後にした。水平飛行にはいる前に機内天井の真中より白い煙がモウモウと吹き出してくるので機内は騒然と成ったが、クーラーの煙とわかってほっとした。前に乗った人は、離陸してすぐに酸素マスクが降りてきたので、人生の終わりと思ったらしいが、スッチーは顔色かえず、ガムテープでとめて行ってしまったらしい。左の窓からアンデスの山並みが見えたのでアメリカ人女性と席をかわってもらって写真を数枚撮った。サンドイッチとケーキとオレンジジュースが配られたが食べることができなかった。小柄な東南アジア系の女の子が歩いてきたので声をかけると阪急交通社の添乗員のお姉ちゃんだった。クスコの空港は4000m近くあるので着陸は難しく軽いほうがよく、霧が多いので早朝着陸が確実でリマに引き返すことが多いらしい。運良くアンデスの山あいをくぐり抜けた機体は徐々に下げて7時15分にクスコに着いた。

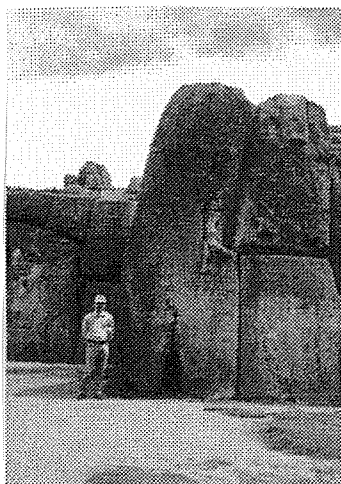
到着ロビーにはドデカイ黄金の仮面が飾られ、コンドルバス(コンドルは飛んでゆく)で迎えてくれた。バスに乗り込むと新たに2名のガイドがついたので紹介されバスは動き出した。クスコは、ケチャア語で「へそ」であり中心の



黄金の仮面



ホテルでの食事



サクサイワマンの巨石



記念写真



街。16世紀にスペイン人の征服者たちによりインカは山奥へと追いやられ、インカ帝国の建物や石積みを壊し寺院、住居を造り壊した建物の上に新しい建物が造られている。現在使用されている多くの道路は、インカ道を基礎としており、橋、トンネル、灌漑用水路などは今でも使用されている。段々畑（アンデネス）は、人々の生活の糧を生み出すものである。インカ帝国には文字、車輪、鉄器はなかったが暦はあったらしい。ホテルに向かう街の中に9代皇帝の銅像が立っている。インカ帝国の首都であったクスコは天に近く、思いがアンデス山脈を越え届くように感じられたが、高山との戦いが思考を狂わせた旅と成ってしまったことに気づけなかった。クスコの近郊にはピサック市場など多くの魅力的な市場がある。身の安全を考えて「笛」を持ってきており我ながら良きアイデアと思った。

午前7時40分にホテルに着くとコカ茶が配られたので飲んでみると、その横にコカの葉が置いてあるので東北のおじさんがポケットにねじ込んでいる。有名なピサック市場を案内してくれと頼んだが、昨日観光客の女性が襲われたとのことで、地元のガイドは全然相手にしてくれない。手口はホテルより出てくる観光客をつけて人通りが少なくなったら首を絞めて気を失わせて持っているものを全て取ってしまうらしい。どうしても行きたいなら最小限の服と時計をはじめ装飾品を全てはずし、少しの小金を握りしめて行くしかないと言ってくれたが、案内する気はないらしい。諦めて部屋にはいると相当古いホテルで部屋には時計もなく暖房もきかなく、トイレも流れなく、プカプカ浮いてくる。220Vでコンセントは日本と同じで便利で良かったが、テレビも9時には映らなくなってしまった。家具は民族調のものであるが、よく見ると古く部屋の鍵は自動ロックを加え3つもあり、部屋の鏡だけは縦2m横1mほどあり立派である。昼食まで寝るようにと言われたがなかなか寝られなく12時に1階のレストランに降りると昼食の準備ができており、チクワニ町の川で取れたペヘレイ（川魚）がメインであっさりとしてうまい。じゃがいもが添えられているが半煮えて他に人参とインゲンとレモンが乗っている。

クスコ市街はピューマを形取っており、サクサイワマンが頭で、泊まったホテルの場所がしっぽに当たる。ここにもアルマス広場があり心臓部でインカ時代は「ワカイパタ」と呼ばれ神聖な場所であった。サクサイワマンは1日3万人が80年かけ造られた広大な石垣城塞で、形作る巨大な石をどのようにして運んだかが謎です。

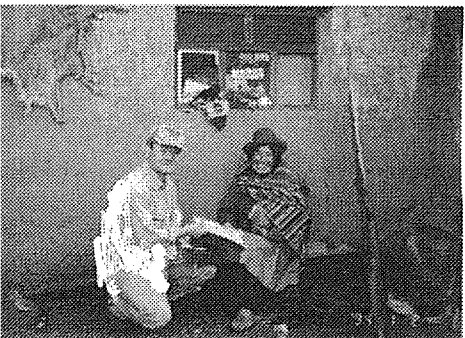
毎年6月24日にサクサイワマンの前でインティラミ（インカの祭り）が行われる。チチャは皇帝が太陽の神に捧げた後、皇后や太陽の処女に分け与える。リヤマの首を切り胸を開いて心臓と肺を切り取り太陽の神に捧げる。リヤマの血とトウモロコシの粉をまぜて饅頭を作り皇帝と神官が食べる。話は変わるが、チチャモラーダは、抗酸化作用のあるポリフェノールの一種であるアントシアニンが含まれている。紫トウモロコシの種子より抽出した色素をゼリー、あめや飲料水の着色に利用している。紫トウモロコシの色素で大腸ガンを抑制することが証明されており、地元では、水煮した汁を布ごしし、新鮮な果物や砂糖を加えたものが愛飲されている。さらに片栗粉を入れてゼリー状に固めたものをマサモーラという。乾燥させたトウモロコシを水でふやかしてから噛み砕き、カメに吐き出して貯えて醗酵させたものがチチャ（どぶろく）で儀式に使われていた。噛み砕きカメに吐き出していたのがアマクーナの太陽の処女たちであった。聖なるものとしてピューマ、コンドル、ヘビで、空と地上と下界をあらわしている。スペイン人200人がやって来て皇帝はインカの守り神は白人なので足元に呼んでしまった。皇帝はおこしに乗っており決して地に足をつけない。スペイン人は隙をねらって皇帝を引きづり降ろしてしまったので、インカの兵はびっくりしてしまい唖然とし、兵の見ている前で皇帝は殺されてしまった。サクサイワマンは入口が小さくインカ最大の城塞であるが2万人が立て籠もり、反対の丘に200人のスペイン人が陣取り対峙した。インカは石で、スペイン人は、鉄、ホーガン、銃、大砲を持っていた。トウモロコシは、インカの民にとって聖なる食べ物なので種をまく時期には兵は畑に行くことに加え夜は戦わないので、奇襲をかけると逃げまどうだけであった。巨大な石は、街に降ろされ教会などの礎となった。現地の子供たちが高山病に効く野草（ハーブ）を持ってきて、しつこく買えと言うので添乗員が買っている。下り口にアルパカを引いているインディオの女性が手を招くので行くと、写真撮影なのだが、要求より極端に少ない小銭で済ませた。



豊作を占うケンコー遺跡



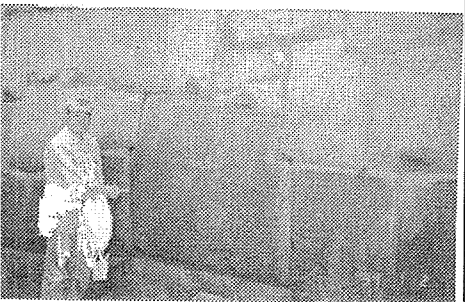
真正面に座る少女



入口に座っている
インディの女性



アンデスの民家を訪問



インカの建物を支えた
12角の石・すき間がない

次にケンコー遺跡に行くと巨岩の表面にジグザグ溝があり、チチャを流して、どこの溝を流れて行くかで豊作を占うもので中心を流れて行けば豊作とのことである。祭礼場で聖像を安置するための19の小部屋が造られ自然石の下に地下道がある。

少し行くと「PUKA」があり、ケチュア語で赤いの意味で、別名「赤い要塞」といわれるプカプカラ、それに水浴場で石壁の隙間より昔と変わらず常に一定の水量で水が流れ続けているタンボマチャイ遺跡の水源も今でも謎である。遺跡の真中に民族衣装を着た少女が座っており、写真を撮るとモデル料を要求してくる。必ずその少女が写るのでよく考えているのか、ずうずうしいのか。ここは宿場であるが宿はなく、チャスキ（飛脚）は2 km毎交代して走って伝達していたらしい。

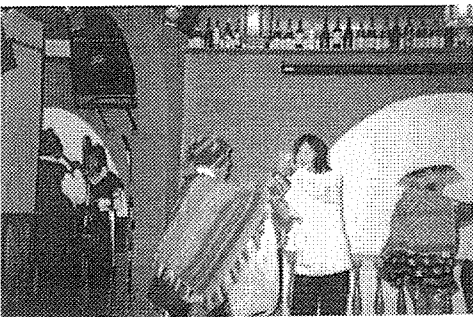
少し下っていくと一般家庭と言われるインディオの民家に着いた。生憎雨が降っておりぬかるみが続く。畑の中をブタを追いかけて遊んでいる子供たちを横目で見ながら日干し煉瓦の家にはいる。入口にインディオのおばさんが座ってニコニコしている。家の中に入ると突然子供が現れ胸のボールペンをしつこせがむ。家族団らんの場所に裸電球が一個あり、奥では薪が燃えており大型ねずみのクスがネコとじゃれ合っている。仕事は家族分担制で父親はクスコ市内に働きに行き、奥さんが畑や財産のリヤマやアルパカの世話をするらしい。クスコの公務員の平均月収は250ドル、一般は150ドルで、長くて5年くらいの勤めで、働きながら次のよりよい職場を捜すらしい。大学はクスコ大学が一つで他にいくつかの専門学校がある。小学校が6年、中学校が5年、大学が5年で卒業の年は22歳である。公立学校は三部制（朝・昼・夜）で行ける時に行けばよく、物売りの子供たちが多いのでそうしている。この家族にカップ有家そうめんを渡して写真を撮ろうとしたが子供が奪って行ってしまったので、チラシだけの写真と成った。余談であるが、3歳に成るまで家族の人数に入れない。アンデスの民の寿命は平均で60歳位であるが、たまには驚くような高齢者がいるので、それが話題になって神様に崇められるらしい。日本のテレビ局がマカおじさんを紹介しており18歳をはじめ3人の彼女を持ち、毎日毎晩元気らしい。又、混血が強くて長生きするらしい。勤めは午前中は8時から12時で、16時まで昼休みでほとんどが家に帰る、それから16時から19時迄の勤めである。

市街地に降りてサント・ドミンゴ教会に行くと雨が降ってきた。太陽の神殿（フリカンチャ）は、黄金の太陽神が祀られていて、この神殿の上にスペイン人が建てたのがこの教会である。1650年と1960年の2度に渡る大地震で上層部は崩れてしまったが、インカの石積みはびくともしなかった。11～13度の台形にし日本の木造建築のように石と石を組み合わせているので地震に強い。石と石を組み繋げている。皇帝はミイラにして生きていることに成るので、一人ずつ宮殿を持っている。クスコの街にはインカの基礎を残してスペイン人はその上に石積みの建物を建てている。スペイン人がしたものは石と石の間に漆喰を使っているのですぐわかる。教会の中にある売店に行くと、コカインの飴があり、試食だけにして出口に来るとインディオの女性がアルパカの毛糸をつんでいた。

カテドラルの裏手のアトゥンルミョク通りの片側で宗教美術博物館の石壁でカミソリの刃も入らないと言われる程すき間がない12角の石とツーショット。アルパカに引かれた少女が写真の前を歩いて行く。

ホテルに早めに着いたので、ガイドの目を盗んで近くの食材市場に出かけて行くと大量のコカインの葉や名前わからない食材があったが、インカ塩とキヌアとマカとケーナを買って、ちゃっかり写真におさまった。帰りの道路沿いにペルー型共同店舗があり100店程入店しており珍しいものばかりである。ポーチとインディオの帽子とプロ用のサンポーニアを買って帰り、ガードマンが鉄条網のロックをはずして中に入れてくれた。フロントは黒人との混血の美人がいたのでセフティボックスを借りることにした。横には両替をする女性にっこり笑って座っていた。泊まりは我々だけで私が1回両替しただけで一日中黙って座っているのだろうか。

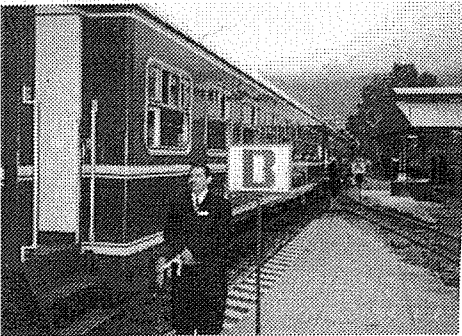
夕食はバスに乗り市内のレストランでfolklore、インカ帝国時代以前より受け継がれてきたビエンスト（風）と言われる音楽会。演奏中の中にオカリナを田中健に教えた先生がいた。アルパカの肉やクスの（大ねずみ）の肉が皿にあったので勇気をだして飲み込んだ。同行の静岡のにじゅうくさいのギャ



誘われて踊る女性



folkオーレショー
(クスコでの夕食)



列車ごとの車掌



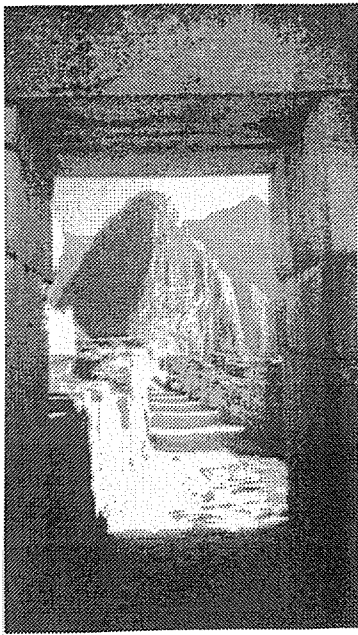
住居跡で藁葺きなので
屋根は残っていない

ルをおだててステージに登らせ民族の踊りをさせてしまった。次の日はタイガーマスクならぬサンソーマスクにお世話になることに成り申し訳なかった。夏であるが夜は寒いので暖房にしてくれと要求すると音だけのサービス。やかましいのでスイッチを切って毛布引っ張り出して寝ることにしたが、近くの若者であろう、ホテルの前の道路で一晩中歌ったり踊ったりしているので寝付かれなかった。

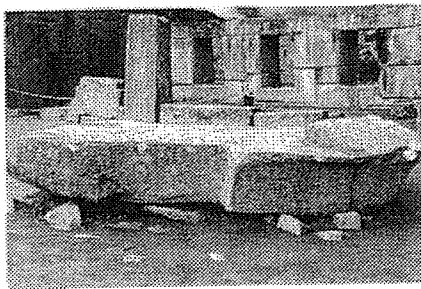
次の日はインカ帝国遺跡のハイライトであるマチュピチュに向けてのクスコ駅よりの旅立ちであるが、一人が高熱で4人が頭痛と下痢がひどい状態である。二度と来れないかもしれない旅なので気力を込め部屋を出た。パンをひとくちだけ食べるのがやっとでバスに乗った。バスは特別の入口より入った。1905年開通した高原列車(ブルートレイン)は6時18分に出発し、クスコ市街の家並みを抜けスイッチバック方式で登り始めた。クスコは盆地なので3800m位迄登る。至る所で民族衣装を着た女性や日なたぼっこする男性が手を振ってくれる。列車は専用列車なので区分されておりお客ごとに車掌がいる。7時10分にポロイ駅に着いた。ワゴンでの販売はインカコーラ、ビール、パン、チョコ、菓子などがあり、次の車両に渡れないので片づけて次の車両に行く。それを4時間の間繰り返していた。オヤンタイタンボ駅に着く頃、トイレに行くと行列ができており堪えきれない。前に並んだスペイン人女性2名が同時にはいったが、なかなか出て来ない。駅に着く頃ようやく出てきたので、前の女性にお願いして先に使用させてもらい中に入った。急いでズボンをおろして便器に座ったら機関銃のように打ち出したのでほっとした気持ちで何気なく流してしまった。列車は駅に停車しており、垂れ流してしまったので駅員が車体をドンドン叩いてスペイン語で怒っていたが、出たものはしょうがなく開き直って次をがんばった。昔の国鉄が停車時には使用しないで下さいと張り紙が張ってあったように、落ち着いて見ると目の前に張ってあった。9時にウルバンバ駅に着く、ウルバンバ川はアマゾン川の上流になる。10時28分に到着し4時間10分かかった。駅より露店が続く、カラフルな雨合羽が1ドルで売られている。乗合いバスの発着場に行く間は露店が並ぶ。轟々と流れる川を渡りバスに乗り30分かけて4000m登った頃に土砂降りとなった。クスコは3800mあるがここは2800mであるのに空中都市と呼ばれる。登山道口に杖が置いてあり自由に借りられるらしく、登って行くと突然視界が広がる。そこはインカの謎の都市であるマチュピチュ遺跡である。段々畑の塀は全て石。遺跡の周囲は、高さ5m、厚さ1.8mの城壁で固められた要塞の「空中都市」。総面積5km²で半分は斜面。聖職者の水くみ場があり、サイフォンの原理で水を引き込む方法を知っていたと言われ、石に溝を刻んだ地下用水路を造っている。歴史遺産も同じであるが、目と耳と肌と鼻と口と他にもうひとつの見方や感じ方があり見はるかす夢を巡らすことが大切である。マチュピチュは時が止まっていたが、周りのアンデスの高原は時がゆっくり流れているようでした。空間を最大限に利用したインカの民には驚かされるが、崖より川に落ちた人も多かったと思う。下を見下ろすと地底をえぐるような川音と山頂より吹き下ろし山間を走り抜けるさわやかな風の音。ペルーを流れる27本の川がアマゾン川にそそいでいる。晴れたときには紫外線が強いので1~2時間で皮が剥けてしまうらしい。背後にある切り立った山は霊峰ワイナピチュで、マチュピチュが「老いたる峰」ならワイナピチュは「若い峰」です。こんな山頂に都市を造る必要があったのだろうか。文字や鉄器ももたず石器の時代のままの文明が高度な文明を残したのだろうか。段々畑から市街地に抜ける門をくぐった頃、又雨が強くなったので、ただ単に足元の石段を見つめ歩いているだけだった。

3000年前チャビン文化が生まれ、その後モチーカ、ナスカ、チムといった文化が栄え、12世紀初頭頃には、首都クスコを中心に5000kmにわたるインカ大帝国を形成。1523年スペイン人に滅ぼされて1821年に独立した。インカ帝国の遺跡のハイライトであるマチュピチュ(老いたる峰/空中都市)は、1911年に発見され多くの謎を秘めており、山の斜面に王宮、神殿、灌漑用水路まで精微な石造技術で造られています。なぜこのような山頂に高度な石造建築の街を造ったのか、いまだに多くの謎を秘めた遺跡です。

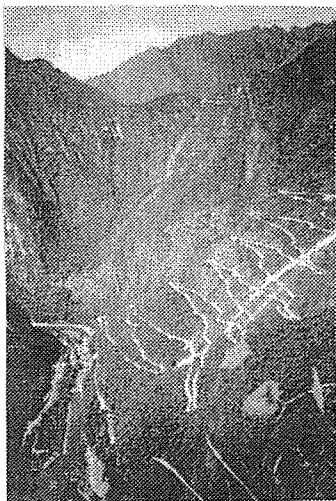
2日間何も喉を通らない高山病で最悪の時、長崎より片道2万キロの旅は、「八甲田山の雪の行軍」のごとく過去の辛さで今を乗り越えられるかのように、何故か辛く苦しい過去に再び記憶が戻ってしまう。東京に出て商社に勤めながら音楽事務所に籍を置き夢見ていた頃、事務所より依頼される詩に曲を付ける



マチュピチュ遺跡の入口



生贄の台



グッバイボーイは
まっすぐ下る。



インカ石の棍棒頭

日々、それと商社の仕事との両面で悩み悩んで2度にわたり三井記念病院に救急車で運ばれ、担当医より「次は保障できません」と言われ急遽空輸され島原温泉病院に即入院して1年間療養する事になってしまった24歳の頃が蘇ってくる。後は余分な人生と思うに十分な時間をかける必要があった。復帰に向けて有家町役場にお世話になっていた頃、叔父が島原高校の校長等を歴任して島原中央高校の校長をしていた時期で、教員に來いと強く言われたが、再度受けてクラリオンガールの烏丸せつ子さんのお世話などに当たることに成ったことが脳裏をかすめた。

一度下山すると高山病は治るとのことで頭痛はなくなってきたようだ。藁葺き屋根だったので今は残っていない住居跡。遺跡から覗くとそこは地底をえぐるような川音と山頂より振り下ろし走り抜けるさわやかな風の音。曇っているが紫外線が強い。少しの日差しで真っ黒になる。こんな山頂に都市を造る必要があったのだろうか。インカの遺跡を巡りながら体に鋭気が戻ってきたように感じられた。出口にある高級ホテル「サンクチュアリ・ロッジ」のレストランがあり昼食はそこですることになった。入口をはいるとコンドルバス（コンドルは飛んでゆく）で迎えてくれた。バイキングで種類が多く、ここで食べないとお店はないので大変な混み合いである。ここでようやく食欲がでてきた。

乗り合いバスに乗るが、満員に成るまで出発しないとのことであり、だいぶん待たされてしまった。バスは、つづら折りの道を下って行くと、子供が道路のわきで「グッバイ・グッバイ」と手を振ってくれていたの、みんなも現地の子供と思い答えていた。しばらく下ると又同じ子供が立っていて「グッバイ・グッバイ」と手を振っている。それが繰り返されると乗客の女性が持っているお菓子をあげたくて「ストップ」と叫んだところ、あちこちで声が上がったが、運転手は無視して下って行く。5～6回繰り返された頃、バスは止まった。子供が乗ってきて各国の言葉で「さようなら」を言ってチップを集めて回り空席に座った。降りるときに子供を見ると両手にいっぱいのお菓子や握っていた。子供はそのままバスに乗って登って行く。最初はバスと競争して勝ち誇っていたことが商売に成ったようだ。飛脚の衣装を着て走るのでチャスキボーイと呼ばれる。

駅まで露店が並んでおり、線路沿いには列車が通れそうもないほど商品を並べている。川は泥流と成っているが上流では石を切っている。薄暗い露店を覗くと針刺しを勧められた。1人が1ソル、2人が2ソル、3人が5ソルというが、単純に3人なので3ソルではないか。人形でもお腹に針を刺すように成っているのを買うのをやめた。薄暗い奥の老婆の足元に丸っこい石が5個転がっているのに興味をそそり、指さすと取って見せてくれた。2個に穴が丸く開いているだけで普通の石のようなので穴が開いている方は何かと聞いたら、老婆の早口の現地語が長々と続き意味不明のなかに「インカストーン」だけが判ったので静かにわけてもらった。何故なら昨日、黄金博物館で戦いの時、石に棒（棍棒頭）を通して武器にしていたことを聞いていたためである。マチュピチュ駅で現地（ローカル）のガイドにに聞いてみると「同じ採石場より盗んできて加工したものかどうか判らないが、時々本物があります、代表的なインカ石なので、ここに來た記念として大切にしたらいい」と話してくれた。

夕刻マチュピチュ駅を出発した列車は、クスコに向けて走り出した。帰りは右の窓席が良く、クスコからは左側の窓席に座るならいろんなことに会えること請け合い。途中のポロイ駅で乗客の多くが降りてバスに乗っているのガイドに聞くと、ここより1時間かかるがバスなら15分で着くと列車の中で誘うらしく、別にお金を出す上、50分はかかるはず。ここまで来ていながらクスコの夜景が見れないのが損であるという。クスコの夜景が綺麗で眺めていると間近に牛を引いた親子がぼんやりと見え、ゆっくり列車に手を振っている。3500mに成りだんだん寒くなり、暖房もない車両内は肌寒く、より一層車内灯もぼんやり照らしているように見える。列車は、スイッチバック式で下るので必ず停止する。それを狙って乗客が飛び降りるので車掌は怒鳴ってばかりで大きなリックを背負った男女がかけ行くの見える。午後8時5分にクスコ駅に到着した。駅の周りは食べ物や郷土品の店でごったかえしており、露店リヤカーがパンや果物や野菜などの食材を豊富に積み所狭しと並んでいる。チョロと呼ばれる三輪車が街の中を走っている。ホテルでの夕食を済ませて部屋に入り10時には眠っていた。午前2時に目が覚めたので起きて書きものをして朝の風景をホテルのベランダより撮っていると午後5時である。今日はプーノ

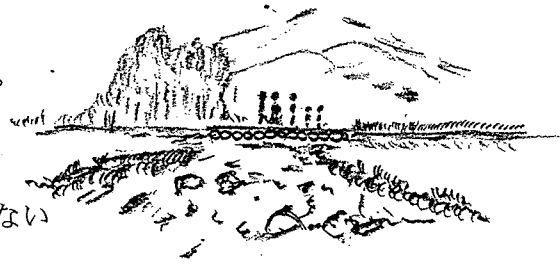
に向かう。

「雑木の架け橋」「アンデスに架ける橋」

村の娘が嫁ぐとき
必ず通る小さな丸太の橋
知らずして娘らが足を止め
水に映る我が身を眺め
遊んだ遠いあの日
何時か涙がせせらぎに落ちる。

急かされて歩く足どり重く
母がこの橋を渡り終えたら
振り向くなと言った涙の声は
何時か耳を抜け山々にこだまする。

母に背負られ渡った幼い日
今度この橋をきつとあの人と渡る
彼のもとへ続く道も遠くても疲れない
何時かこの道も二人で歩く
嫁ぐ日必ず渡たり立ちすくむ
村の丸太の橋
娘は涙と一緒に流すので
水の絶えない村はずれの 雑木の架け橋



民芸品を並べるインディオ

インカ帝国の首都クスコの夜景



オロペッサのパン



バスターミナルのチョコ

午前7時出発、クスコでのガイドの小島さんと現地のガイドともお別れである。地元写真屋が至るところで撮影した写真を出発までしつこく買えとバスの中まで入って来るので、二度と来ないかもしれないという感情で2枚とも買ってしまった。バスにはトイレが付いているが、用心のためであるとの発言で、参加者より何のためにトイレが付いているのか、自由に使用できないのかとの意見で、ガイドのお姉さんは発言を訂正した。しばらく走った頃、バスがオロペッサに停車して突然ガイドが少女を手招きしてお金を支払って大きな袋をもらっているのが窓越しに見えた。バスの中で開けると大きなパンが3個入っており、日本の胚芽入りパンみたいな焦げ茶色のでかいパンであるが、味はなかなか美味しく儀式用のパンであるらしい。ガイドのお姉ちゃんをモデルにして写真を撮ったりして遊びながらバスは進んでいった。道のまん中を牛を引いている子供たちにバスはクラクションを鳴らしながらさらに進んでいった。お腹がじわじわ危なく良くない。バスは猛スピードで走り、休憩地点になるミクワニのバスターミナルに着いた。ここは標高3,542mで急いでトイレにはいる。入口で女の子に0.5ソール渡すと、日本でも安く売られているちり紙を3枚渡してくれる。便器には台座がないので腰を浮かせてしなければならないので特にしにくい。がんばっているのにもかまわずに途中で女の子がバケツで汲んできた水を便器に流してくれる。バスの出入りのたびに鉄格子が掛けられ、機関銃で我々は警備され、鉄格子の回りには地元の人たちが土産品を持ち寄り叫んでいる。時間があつたので用心のため、地元ガイドを伴ってターミナルの店を見てまわり、4店舗出店しており大きな粒のポップコーンを買ってバスで乗った。バスは、どこまでもまっちゅぐ（歌之介の世界）なパンアメリカンハイウェイをひたすら猛スピードで走る。道のまん中を牛を引いた子供が堂々と歩いているので、バスはヒステリックにクラクションを鳴らしてレース並に走る。アンデス山脈6千mの山々が近くに感じられ、特に呼吸がしにくく成ってきたと感じた時、バスは停車した。

ラ・ラヤ峠である。頂上が白いのは雪は降らないので雪ではなく氷河である。この旅での最高地で標高4,335m。インディオの女性たちがエスキモーやロシア人がかぶっているような毛皮の帽子（20ドル）や服を売っている。回りには4千m以上にしか育たない草を美味しそうに食べているリヤマやアルパカが放牧されていて、少女たちが見守っている。又、バスは走り、素焼きで有名な3,879mのプカラの町に着いた。日本の田舎にある「駄菓子屋」のような店にはいり、トイレの順番を待っている間、お店のお姉さんと片言のスペイン語で話しながら派手なエケコ人形があるので何を背負っているのか見てい



4335mのララヤ峠



H人形とおばさん
エケコ人形を写真に撮る



ウル族独特の エケコ人形



ウロス島



食材とハーブ

ると、お姉さんがわざわざ H 人形を取り出してきて見せてくれた。ボタンの所を押すとポコチンとお●●こちゃんこんにちは。お姉さんひとりで笑っているばかりである。0.5ソールを少女に渡して便座がない便器で用をすませた。

少し走って昼食となった。そこは湖と山に囲まれた菜の花が辺り一面に咲き誇っておりその中で食べることに成った。おにぎり弁当だったが、食欲がないので近くでアルパカやを追っている少女にやると顔がほころび喜んで持って行ってしまった。朝早く食ベタ方まで何も食べないらしい。バスに乗ると同行の静岡のお茶ギャルが酸素を吸っているが、カメラに向かって何故か V のサインである。さらにバスは猛スピードで走るので荷物が落ちる、棚に載せることを何度も繰り返していたが、とうとうやめて膝に置いているようだ。プーノの入口にも料金所があり、その先に新車のトヨタのランドクルーザーがエンジンをかけ待機している。突破する者もいるのであろう。チチカカ湖が望める場所で記念撮影して町にはいると市場の広場をバスは走る。闇市ならぬ密輸入品が多いらしいが活気がある町である。同行のおじさんが昼の弁当を市で売っている人に停車したとき渡している。

午後2時にチチカカ湖のたたずむ五つ星のホテルに着いた。綺麗なホテルであり、入口の右に高山動物の素材のマフラーやセーターが売っている。部屋に入り荷物を整理していると、ベッドサイドのテーブルにチャリンと音がして透明のガラスが落ちたのでスタンドなどの部品化と思って調べていると、集合時間の2時30分が気になって腕時計を見たとき、秒針が曲がっており、初めて時計のガラスがはずれていたのに気づいた。肌身離さず身につけている●●年前に買った同じモデルのインカの黄金に負けない金時計のガラスがはずれていた。ロビーに降りるとコカのお茶コーナーがあり皆が並んで飲んでいる。3,900m程の高度があるので、歩くのもしんどく階段の上り下りが特にきつい。

ホテルの前のより船に乗り込みチチカカ湖に浮かぶトラの浮島ウロス島に向かう。8,032km²で琵琶湖の12倍近くあり、ウル族で25程の島に住んでいる。島が25くらいと言うのは、夫婦、親子、兄弟間での争いがあつた時に、その島を分割してしまうそうで、日本でも喜ばれ心安まる便利な仕組みである。ペルーとボリビアにまたがる湖で、インカ帝国の罪人が島流しにされ、住み着くために考え出されたのが浮島に住むことだった。船は浮島に着くとみんな歓迎され、歓迎の歌を子供たちが「さくらさくら」を歌ってくれた。その後葦の茎を持ってきて食べろと言うので食べたがまずかった。だが子供のおやつに成っているとのことだった。大きいのは300人くらい生活しており、野菜畑や学校や教会などもある。次の島に渡るためにトラの船であるバルサに乗って向かう。小学校で先生が子供を集めて日本の唄を歌ってくれたので、入口にある寄付箱に1ドル入れた。歴代の大統領でウロス島に初めて来たのがフジモリ氏で、学校を建ててくれたのも彼とのことで人気が高い。隣が教会なので覗いてみると何もないので教会の前でインタビューに応じてビデオに収まった。その隣の住居を覗くと鶏や豚が飛び回っており臭いが相当きつい。湖も独特の臭いがある。この湖は水洗便所であり飲料水にもなるらしとのことは、世の中の輪廻であり自然の掟ともいえる。洪水の年には水鳥が巣を木々の上に作り、じゃがいも畑はムネを垂直にすること。ウル族が代々伝えてきたエケコ人形をガイドを通訳に長い交渉の末、素焼きで素朴なものを5体買った。この人形は、エケコの持ち主が欲しいと思うものを背負わせるもので、アンデス高原の原住民の神様。背負うミニチュアは24日の正午に買うのが縁起がいいとされています。口には穴が開いており、それは火曜と金曜に感謝を込めてタバコを吸わせてあげると喜ぶそうです。チチカカ湖には2000人が住んでいて電気はソーラーシステムで賄われており電話もあるらしい。水分が多いのでリウマチが多いらしく浮腫んだ体格である。乾期は3ヶ月ごと、雨期には15日ごとに葦き替えるとのこと、たばこは厳禁らしい。島自体は、葦を積み重ねたもので、水に浸かっている部分が腐ってくれば、新しい葦を重ねていく。帰りの船が来たので行商に行くお姉さんを乗せてくれと言うので皆が了解してホテルに向かった。

部屋にはいり冷やりとした夕日が沈む光景を眺めながら梅をかじり、ガラスが取れた腕時計をぼんやりと眺めていたら、ガイドのお姉さんより電話があり、夕食のためのレストランに向かった。スペイン人とアメリカ人のグループが元氣よく乾杯しているのを横目にテーブルに向かう。チチカカ湖が望めるすてきなレストランであり、バイキング方式であるが食欲はないのでジュースだけを



コカ茶コーナー



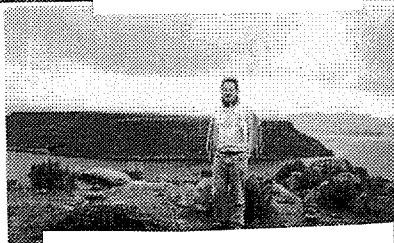
部屋よりの風景（朝日）



食材を売る少女たち



エナジーストーン



ユーホーアイランド



珍しいビクーニャと

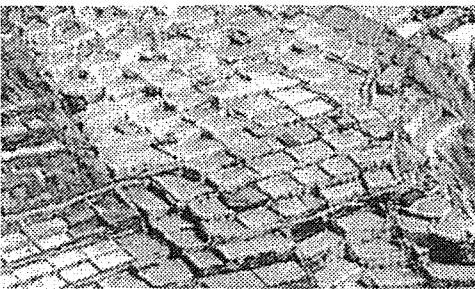
少しずつ飲めるくらいである。クスコが3,800mで、マチャピチュが2,800mなので少し体が楽になり食欲も出てきたが、プーノは4,000m近くあるので体は戻ってしまった。夜空には南十字星が恋人たちにささやきかけてくるように近くに見える。

高山病（ソローチェ）は、インカを征服したスペイン人もおそれたらしい。標高1500m以下の低地から2000m以上、特に2500m以上の高地に48時間以内の短時間で到着した場合や更にその高度から1日に高度差500m以上上昇した場合に発症する。血液中の酸素が不足して起こります。頭痛、めまい、吐き気、下痢等で薬を飲んでも効果はなく下山するしかありません。暴飲暴食、喫煙、入浴、飲酒、大声、性欲の禁止を何度も現地のガイドにリマの空港でつく言われた。コカの葉を煎じて飲む。高山病を抑えるお茶としてホテルをはじめ至る所に置かれている。コカの葉もカゴに入れて置いてあり噛んでいると舌が痺れ、脱脂綿に染み込ませ、こめかみに当てるとスーッと酔いなどが和らぐらしい。頭痛と下痢で毎日が二日酔いの状態のうつろな青白い顔が朝から晩まで続く。部屋に戻りテレビを見ていると洗剤のアリエールの宣伝が繰り返されており99ソールなのだ。

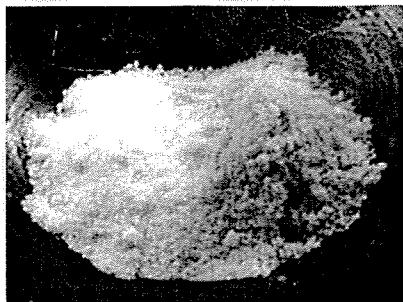
湖水からこぼれるような見はるかす地平の向こうから登る朝日を眺めていると2人乗った船がゆっくり岸を離れて行くのが見える。急遽秋葉原で買ったビデオカメラで覗くと釣りに行く親子のように見えた。まだ早いのでフロントに降りて朝市ならぬ市場を見せてくれと頼むと、危険なので単純に廻ってくれるタクシーを紹介してくれた。車は人気のないプーノの町をゆっくり走り抜けてきたが、それだけで満足だった。少しだけキヌアと生マカだけは買った。路上でリヤカーに食材、日用品や薬草（ハーブ）を並べているが初めて見るものも多い。チャリンコタクシーが行き交う。昔のミゼットが走っている。ホテルに着くとレストランに行き、食べられない朝食を食べるように座っているだけでありチチカカ湖の風景だけがあたかも大きな栄養源であった。ホテルのロビー前の専門店でピクニャの高級セーターをカードで買っているとこのことで横浜のお姉さんが呼びに来るので行ってみると、仙台に間欠泉を自宅に持つお金持ちのおじ様が抱えているのはセーターだけではなかった。8万円のセーターは唇が赤い人の分なのか、自分は20万以上もする特注上着みたいなものを受け取りながらサインしていた。

バスが7時に来たので乗り込み出発した。プーノは標高3855mの人口33万人で観光と農業と民芸品の町である。雨、ヒョウ、あられや雪は降らない赤道に近い。プーノ郊外にあるインカの全身のチュウラホン文化遺跡で標高4kmにあとわずかである。生命が蘇ると信じられており、チュワパ（墓）は穴が開いており全て東を向いているシュスタニ遺跡である。太陽よりエネルギーをもらう太陽の神殿がここにはある。いわゆるパワーがみなぎるスポットであり中心に立ち天より頂くのである。さらには影と角度で日と時間を読んでいた。ウマヨ湖（カルデラ）は、今はバスで通って来たが雨期には道が埋もれ湖のようになり通れなく成ってしまい船でくるしかない。インカ帝国時代の前を総称してプレインカ時代と呼んでおり、ここは1971年に10体のミイラが発掘されている。標高が高いのでカミナリが多いので至る所に避雷針が立っている。カルデラ湖に浮かぶ島がある、それをユーホーアイランドと言って、一家7人が住んでおり、魚を捕ったりアルパカやリャマを育てて生計を立てているらしい。その名のとおり島全体が空母のように着陸に向いている島で多くのUFOが飛来するらしい。高山植物をビデオに撮っていると回りにも珍しい生き物がうようよいるので追っていると、誰もいないので急いで下ることにした。皆は尖った石に抱きついて片手を挙げて写真を撮っているようだ。近づいて聞くと、それはエナジーストーンと言って磁気を帯びた石で人にエネルギーを与える石であるとのこと。ナスカにも同じような石がある。左手を当て顔は写真に写るために左向きである。左手を抜けて全身を駆けめぐり元気にして右手より宇宙に飛び出すらしい。降り口に今はほとんど見られなくなったピクーニャを引いた親子がいたので、お願いして私だけ記念写真を撮った。東北から参加した新聞関係の人は、いつもダジャレの連発であり、よくここまで我慢したことか。今までお話をしましたが、これはわたくしのひとつのアンデス。近くに寄るなりャマだと。バスが止まっている所に降りて来ると子供たちが踊りをしているので、感激した仲間が飴などを与えている。

バスは、この遺跡の事務所か売店に停車したので、急いでトイレに駆け込む

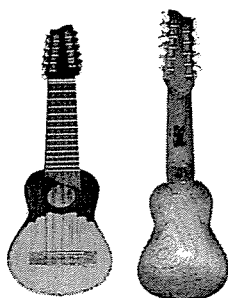


インカ塩水の蒸発（棚田）



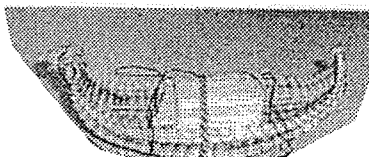
インカの天日塩

ケーナ



チャランゴ

サンポーニア



トトラの船（お土産に）



三輪車（ミゼット）

ために降りて建物に入るとお姉さんがアルパカのセーターなど説明するの尻目に入る。戸もなく便座がないので腰を浮かせてしなければならない。あんまり遅いのでお姉さんが見に来たので、諦めてズボンを引き上げる。お姉さんはバケツに水を汲んできたものを便器に勢いよく流した。

バスは12:09にICAのフリアカの空港を目指し猛スピードでひた走る。広大な平原を走り12:30に着く。時間があつたので空港前の民芸品店を覗くことにした。ここは今までの中で商品も良く値段も安い。ここでコンドルは飛んで行く（コンドルバス）の曲を彩るサンポーニアの民芸ケースとアンデス民の心をあらわす民芸ケース付きのケーナを横浜の姉さんが側で応援するので辛抱強く値切り購入した。横浜のお姉さんも記念に成るとのことで出発寸前に購入するため走って行った。ここは旅行した人しか知らない穴場の店です。空港前に黄色い線があり、それより入ってはならないらしく手招きする。空港内の売店を眺めていると、ひえかかあわのおこしとキヌアが売ってあるので購入した。ここはICAでリマから南へ308km。葡萄が取れワイヤやビスコの産地で10体ほどのミイラと脳外科手術した頭蓋骨5千体が展示されているイカ考古学博物館もある。

アレキパ経由のリマ行きのBO727である。直線に入る前に曲がりながらスピードをあげているのに隣の老夫婦は昼食の鳥のモモ足をかぶりついている。揺れがひどいので離陸してから食べたらどうですか。と言うが止められないのか黙って黙々と食べ続けている。通路を挟んで3席の6席で乗務員の男女も空いている客席に堂々と座っているが、浅黒くピューマ足の美人ばかりのスッチーだったのでさぶるにこやか。「ハポネセス？」と聞くので空港の売店で買ったチョコを渡しなが郷くんみたいに「ジャーバーン」と答えたら、にこっと笑ってウインクしたので、連れがいないとリマでは楽しかったかもしれない。隣の老夫婦のご主人は、セイコー時計の設計者でプーノでガラスがはずれた時計を見せたら、1970年代のモデルで相当儲けさせてもらったものですよと言われ、こんなぐらいではずれるはずがないのですがと言って返してくれた。13時出発が30分前に離陸して出発時刻の13時にはアレキパに着いた。少しの人が降りたので、飛行機のお尻より降りて暑い外気を吸ってきた。座席の頭の上の荷物の扉が全て全開、操縦席はカギもなくいつも全開、なんてこっちゃと思ったが、全員で不審物の点検をしている。乗ってきたのは、旅行者ばかりで重たい荷物を持った人ばかりで、普段しないが離陸前の説明を真剣に聞いていました。13時50分に満席で飛ぶ。スッチーがサンドとケーキとコーラを配ってきたら、隣のセイコーおじさんは、ウイスキーをおねだり、国際線でないので無料のものはないような口ぶりで（牧人さんの想像）あるのにしつこい、しばらくして琥珀色したものを持ってきたら、そろばん三級、家内は昔は産休、サンキューと言って旨そうに飲んでいる。今食べたのに全て食べてしまっている。父親より若い戦前生まれはなんと強いことか。

14時50分に静かにリマの空港に飛行機は滑るように止まった。空港にはあの元気な具志堅お姉さんが待っていた。ドライバーはラウルさんで、バスに乗り込みナスカに向けて出発した。「空気のような人を大切に」しなければ成らないことがわかったでしょうとぼつりと言った。通り過ぎる町の店を眺めていると中古車が多く感じられたが、全て車はお尻を向けている。日本車ばかりだったが、少しずつ韓国車が多くなってきた。成功した人で、フジモリ氏と同じく熊本県出身の平岡氏が電気店の経営しており、地方の町長などを歴任し大地主の娘と結婚しているらしい。24時間スーパーも多く成っているが、まだまだドル建とのこと。人質事件の時は、日本からの取材陣が250人、外務省の人間が120人で11のホテルを貸し切っていたとのことでした。日本だけでもこれだけですから、世界中からは相当なものだったでしょう。今の大使館は三重に張り巡らされた高い塀と木もなく要塞の感じがするので国民から笑いものになっているとのことだった。アメリカンハイウェイをひた走る。山をVカットしており、両側から迫ってくる。明治32年に日本人の移民が最初にカニエに上陸したらしく、大地主の家が見える。地下には奴隷部屋があるらしい。苦しい生活にアンデスを越えたら夢の世界があると信じ逃走して向かったら、高山病と寒さで越えられなく死んでしまったらしい。黒人が最初に上陸したのがチンチャである。黒人とモレノス（白人）は、美女美男が多くスタイルがいいが性格は悪いらしく、黒人とインディオ系（サンボ）は、外見は良くないが性格が良いとのことだった。ペルーでは料理がおいしいのは黒い手が作



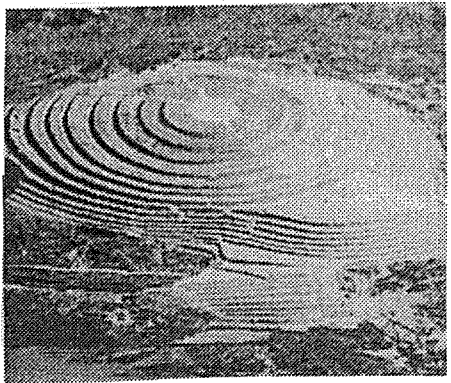
通り過ぎる町並み



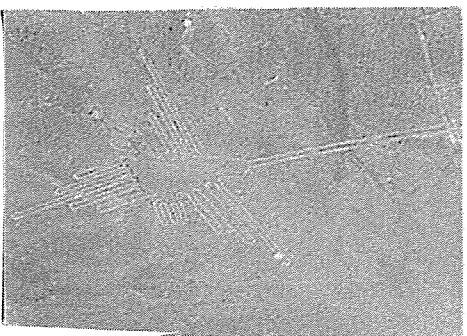
食材を売る昔の少女



遊覧セスナ



モライ遺跡



ナスカのハチドリの上絵

っていると言うらしく料理の50%は黒人が作っているらしい。バスはさらに走り、雨期のための橋を守るためにバスの体重をはかる。トイレ休憩で泊まったGSの売店でスプライトとキシチョコと板チョコを買って20ドルやると52ソルのお釣りをくれた。さらに進むと鶏舎が見えてきたので、ガイドの説明は、長く使うと病気がつくので2~3年で戻ってくるらしい。チンジャの町に入った。ここには福岡県の寄付で小中学校が2校あり、フジモリの奥さんが福岡の出身なので開校式にシャンペン割ったことを紹介。両側が自動車の修理部品工場が左右に並ぶ。遅い夕食のために静かに町に着く。ワランゴでステーキとサラダ、皆はビールを飲んでいたがワインを1本頼みギャルだけに注いでしまった自分があつた。食事が終えて入口に来ると、タンドリーチキンを炭火で焼いておりこれが良かったなと思った。回りの仲間に知識をひけらすようなことを言ってしまった。にわとりは、ションベンはしません。うんこと一緒にするんですと。

スペイン人が作ったのか、中庭のプールを取り囲むように部屋があり、趣きのあるホテルに着いた。建物は古いが部屋も広くミニバーやベランダもありなかなか良い。シャワーを浴びて荷物を整理する。体調が思わしくなく毎日が着いたらすぐに寝るだけである。今日も日本から一緒のお姉さんが、ホテルの備品や設備で不都合なことはありませんか。明日は、7時10分出発です。具合が悪くなったらすぐ知らせてくださいとのことだったので、「横のベッドが空いているので気分がすぐわかるように、今晚も空けていますからどうぞ」と言ったら、それくらい言えるなら大丈夫でしょうと笑われながら切られてしまった。

今日も寝られなく早く起きてしまって誰もいないフロントを抜けて散歩する。子供が2人が箱を持って座っているのを横目でみながら出た。ホテルの回りだけであるが、早朝なのか何故か新鮮である。レストランに向かい食べられない食事をしてフロントに向かう。バスに乗り込むとき2人の子供が靴を磨けて言うてくるが運動靴なのでする必要がないと言ってバスに乗り込むと。よく考えてみると枕チップは1ドルと言われていたが、この旅では一度もやっていなかった。

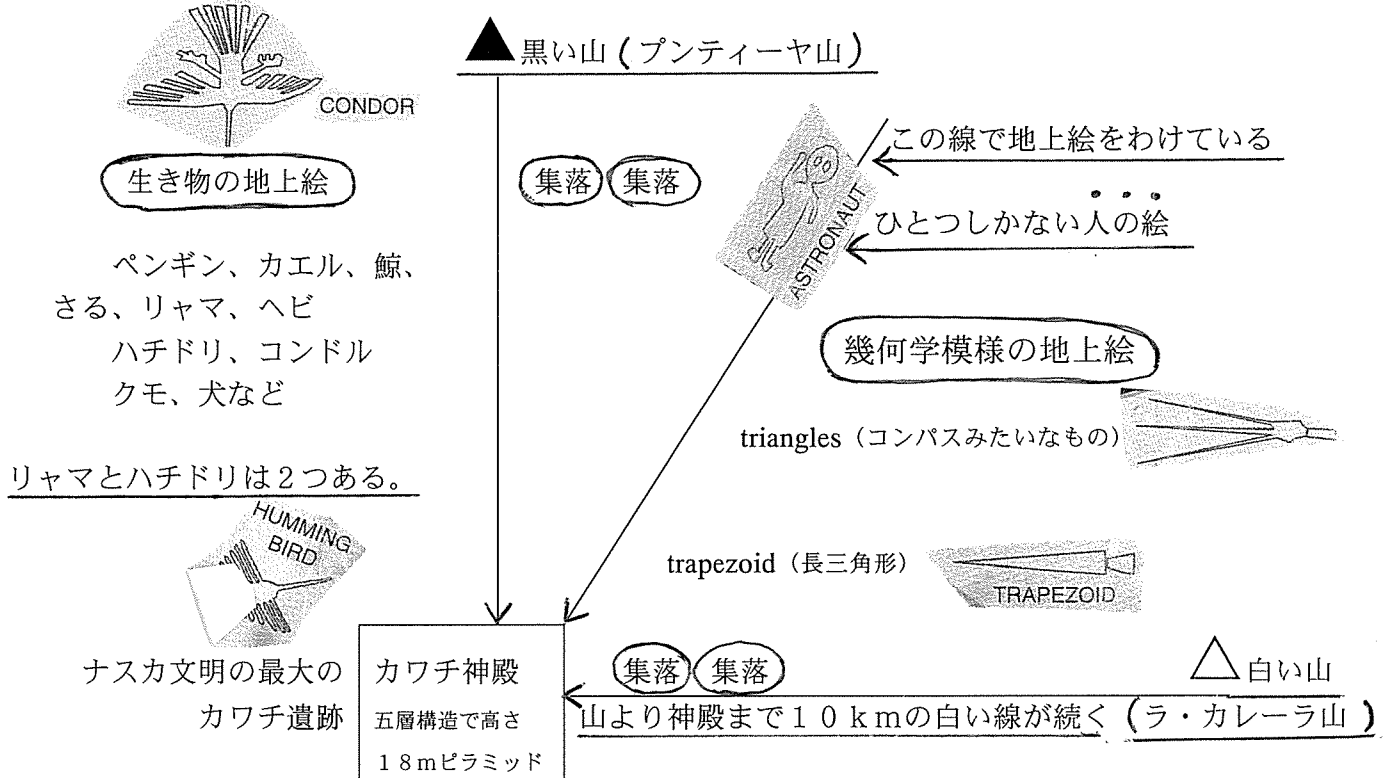
バスは、7時10分に出発した。家の上に鉄筋を伸ばしているのは、お金が貯まったら2階を造る意志とのことらしい。食材の車が所狭しと並んでおり、市場らしくものも見える。10分までに到着して搭乗手続きを行う。搭乗事務所の横のショップで絵葉書を買う。さらに時間があるので道路を隔てた公園事務所の奥にショップがあつたので絵葉書を加えて買った。横にはアイスの店があつて男性諸君がたむろして食べている。この公園の芝生には世界を回っている人々が夜にはテントを張るらしく今は人はいない。搭乗のためにセスナがいるところに向かおうとすると、子供たちが絵葉書のセットを売りに来るので、子供たちの事情を知っているので買ってしまふ。前のセスナが離陸するまでに案内する彼女と乗るセスナと写真撮影する。乗る前に簡単な説明を受け、操縦席の隣に乗ることに成ってしまいシートベルトとビデオとカメラの準備を終えた。ひょんこひょんこしながらセスナが進む。エンジンがフル回転すると操縦席にチップありごとうございます。と張られているのが目に付く。チップは乗る前に地元の添乗員が言われるままにやっている。管制塔から指示を受け、離陸開始したセスナは、大空に向かって飛び立つ。紀元1000~6000年頃栄えたナスカ文明。900kmにわたる広大な平原(パンパ)200個程点在する。10mから350mくらいなものまでである。真中をパンアメリカンハイウェイが通っているので排気ガスなどで消えつつあるとのことだった。クジラ、モンキー、クモ、サル、イヌ、ハチドリ、コンドル、宇宙飛行士など写真やビデオに撮りながらセスナは飛び回る。チップせいか操縦士が見えたかどうか、必ず聞くので、NOと言ったら又旋回するので、ビデオを覗きすぎでムカムカしてきたので、OKと素直に言うようにしましたが、機長はなかなか帰ろうとしません。世界遺産のナスカの地上絵の真中を大型トラックが行き交っているのが見える。着陸する前にモライ遺跡が見える。円形の段々畑で同心円状に造られており外側の畑の直径が100m以上ある。何故谷間にわざわざ造ったのか。場所によっては日照時間が違うので作物の栽培試験をしていたのでしょうか。これも謎です。何のために描いたのか、宇宙人説とか言われるが、わたくしが納得する説をここで説明紹介したい。

NAZCA (ナスカ)

今から2000年前に海岸から80 kmのナスカ平原(900 km²のパンパ)に栄えた文明。ナスカは「つらくて厳しい」という意味がある。日本では弥生時代に当たる。

ユタパンパスは人口1300人の村で、天上の力をあらわすコンドルに、儀式のお酒であるチチャを飲ませて、地上の力をあらわす牛の背に縛り付け、走らせ追いながら豊作を願う雨乞いをする。

コンドルは雨をもたらす神でもある。地上絵で有名なハチドリは雨期にあらわれ、ペリカンが飛来するとその年は豊作になると古老は言う。村の生活は質素で、綿など栽培しており朝食はジャガイモあるいはイモと水ですませ、夜はスープのみである。



黒い山と白い山と結んだ場所に神殿を建てた。ひとつしかない人間の絵が地上絵を区分しており、左が生き物の絵で右が幾何学模様の絵である。また、ヤギ(山羊座)、カニ(蟹座)、処女(乙女座)、ライオン(獅子座)など他もあるが、これらは地上と対比していると思われる。

古くから天の川が生活にかかわってきておりました。豊作になる星(天の川)が見えることを毎年望むが、自然は思うように応えてくれない。天の川を見続けていると、我々が雲の流れを見てロマン溢れるモノに見えたりするように、天の川に浮かぶ動植物を想像して地上に写し描いたら天と地が呼応し豊作になる星空になるように模倣した。いわゆる天の川自体を地上に降ろしてみたい一心で、天の川からイメージできるものを地上に描き、乾いた大地に天の川の水を呼び込もうとしたと思われます。(水に関係がるカエル、ペリカン、ハチドリなど)。パチャママ(大地の神)にコカの葉と酒をささげてから螺旋状に下って行くと川があり、水が勢いよく流れ大地が吸い取るように消え、地上より川がなくなる。それは地上の水が作物を潤しながら大地を抜け、上昇して天の川に流れていることを、いわゆる循環していると、彼らは信じている。

《レッスンワン/地上絵の描き方》

1 m×1 mくらいの原画を描き、その絵を支点にして縄の長さの調整拡大によって100 mから200 mの地上絵が描くことができる。ひとつで書きのように見える絵は、民族楽器で雨乞いの音楽を奏で、それにあわせて村の若者男女が踊り歌いながら足をすりながら往復すると、白い部分が出てきて固まりくっきりと白い線が浮かんでくる。また、酒器などに描かれている絵の間に描かれている仕切り線や町づくりにあらわれる軸線には共通性があり、器の絵が線を軸に折り返して描かれていることにも想像できます。

残念ながら今は、エルニーニョ現象か、天の川の氾濫なのか、水と共にナスカの貴重な文明は消えてしまいました。

NASCA LINES

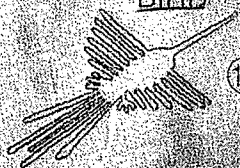
PREFERENTIAL



STAR

14

HUMMING BIRD



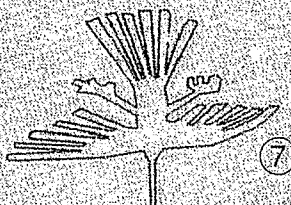
15

PELICAN

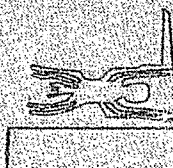
13

HUMMING BIRD

6



CONDOR



SPIDER

8



MONKEY

4



DOG

5



9

TREE



10

HANDS



3

ASTRONAUT



TRAPEZOID



TRIANGLES

2



WHALE

1



PARROT

11

ALCATRAZ

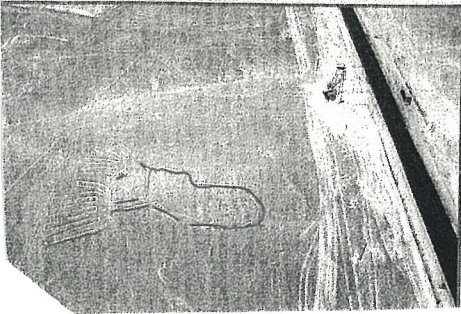
12

NASCA RIVER

NASCA

Airport

N



ミラドールと観測塔



サボテンと虫



ピラニアを売る少女



コンドルは飛んで
行ってしまった



銀製の仮面

遊覧を終え、バスはリマに向かい走り砂漠の真中に止まった。ミラドール（観測塔）に登るらしく、遊覧が終わったばかりで登りたくなかったが、登ると左手が5本で右手が4本の地上絵と木があった。右側には何処までも続く滑走路のような地上絵が見える。下にはインカ石に地上絵を描いた土産品を売っている。又、連れの男性が入っては行けないところで石を捜しているのがガイドが飛んで行き、前よりさらに怒り狂った。今見たのは帰国して世界遺産だとわかった。バスは走りつづける。川が突然消えて地下水となる。砂は続くけど水が豊富で青々と至る所が繁っている。繁っている木は堅いらしく地表の10倍ほど地下に根を持っているとのこと。サボテンの群衆している場所でバスは止まり、サボテンの葉についている白い固まりを潰すと赤い汁が出てくる。これを利用して壁など染色したとのことらしい。

バスは、昼食のために12時30分にイカのリゾートホテルに着いた。このホテルにはプールがあり、週末にはリマよりお手伝いさんを連れて保養に来るホテルらしい。ビキニギャルと、いにしえのお姉さんが泳いでいるのを横目で見ながらピッフェランチを少しずつ食べていると自然と食欲が出てきた。四輪駆動車が止まるとホテルのボーイが数人が荷物を運び込む姿がロビーで見える。食後ホテル内のショップなどを見ながら散歩した。

バスは、リマに入りホテルに着いたときには古里に帰ったような気持ちに自然と成った。部屋に入り荷物をまとめる。着いたときに頼んでいた各種の食材を貰うことができたが、生なので税関で止められないだろうかと心配である。日本から持ってきた開発即席麺が残ったので、すこぶる元気な女性たちに配ってしまった。夕食がには寿司とアサリのみそ汁が出され、オーナーの深沢社長たちよりペルーの状況を聞きながら食事した。経済、漁業、食材について書き連ねてみたい。食材については、後ろに詳しく添付しているので、あえて省略したい。成功した日系人はアメリカに連れていかれたらしく、現在は沖縄人が70%である。頼んでいたマカのチップスが配られたので味見すると香ばしくて全員より好評。

チリのサンチェゴから来るランチ航空は、超朝1時35分リマを離陸しロスに向けて出発。2万キロの帰国の旅が始まった。幸い回りが空席だったので横になって行けると思っている、無料のお酒せいで感じなかったのかクーラーが左足の太ももににあたっているのがわからなかった。帰国してこれが長い苦しみに成ってしまった。ロスでの待ち時間を空港2階の食堂街で同行の帰国したら栄転の兄さんとラーメンとおにぎりを食べながら過ごしていると、高校生がドンドン行ってきて隣に座って写真を撮れと言う。ホームステイで来たとのこと。何で根掘り葉掘りペルーにロスのまでの倍以上かけて行ったのか聞くので答えていると、今度は地球上の農協観光の旗が勇ましくどやどやと多くのお兄さんやお嬢さんを連れてきた。

13時05分発のJAL 065便は成田に向けて離陸した。成田での税関での申請は、何故か汗をふきふきカートを押して通ったことが蘇る。

1997年より国内より始めた食材との出会いの旅。人間をはじめ地球上の生きるものたちが、楽しく長く生きられる食材やハーブ（薬草）があることを信じて。時と空間の狭間で祈りに似た食材さがしの旅はまだまだ続くようだ。

貴重な人生の時間割いてくださり

わたくしとお付合いただき誠にありがとうございました。

心より感謝申し上げ、ここで紀行文は終了させていただきます。

ありがとうございました。

